令和元年度　hugくむ保育園長沼評価書

Ⅰ　経営の重点に関わる事　評価段階（Ａ：大変良い　Ｂ：まあまあ良い　Ｃ：あまり良くない　Ｄ：全然良くない）

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| １．園教育（卒園目標）：社会に出ていく為の基礎ができた子  保育目標：「内面的安定」「自立心」「自律心」  育成目標：「自分の力で気づける子」「自分の考えが持てる子」「行動を繰り返せる子」 | | | | |
| 重点目標 | 評価指標 | | 評価 | 自己評価 |
| 社会に出ていく為の  基礎ができた子 | 保育者との安定した愛着の形成がなされ、年齢に応じた内面的な安定が図られている。 | | 歳児ごとの担任を中心とした保育計画において、個々に合わせた関わり（声掛けや対応）が十分に出来、安定していたといえる。保育士間の情報共有がより行われると、全保育士が同じように子どもに合わせた関わりができ、更に子どもとの信頼関係が深められる。 | B |
| 保育者との安定した愛着を基盤に、自ら人や物に関心を示し（気づき）探索活動の範囲を広げられる。 | | 担任保育士の姿が見えなくなると不安で、活動になかなか入れない子の姿が多々見られた。保育者を安全基地とし、動きの異なる子どもたちが安全に、思う存分探索活動ができるよう、全保育者がひとり一人の子どもの状態を把握し、応答的な関りで援助していきたい。。 | B |
| 自分なりの「～したい」という、自らの考えを持てる。 | | 子ども個々の個人差はあるが、「自分でやろう」という意欲を持ち主張することが出来る環境は十分に作れていた。 | A |
| 自分なりの考えに基づき、行動し、また行動を繰り返せる。 | | 子どもが自己主張の中で、時には激しい葛藤や不安を感じている際、保育士は「自分でやりたかったね」の自分で表現できない気持ちを汲み取り代弁し、根気強く子どもの自己主張に付き合うことが出来ていた。 | A |
| 自分の行動によって生じた結果に対し、自己肯定感（自己有能感）を持つ事ができる。 | | 担任保育士は子どもの行動を側で見守り、支え、安心感の中子どもたちが行動できていた。今後も、保育士全員が温かな眼差しを持ち、子どもが存分に自我を発揮できるよう環境を整えていく。 | B |
| お友達の気持ちを見通したり、一日の流れを把握し次の行動を見通す事ができる。 | | 保育士の仲立ちによって、他の子どもとのかかわり方、生活の流れを見通す力は少しずつ身につけられていた。短期的ではなく、自分の気持ちを相手に伝えることや相手の気持ちに気づくことの大切さなど、子どもの状況に合わせて、その都度丁寧に伝えていけることが出来ると更に良い。 | B |
| 自分の考えや行動を環境（お友達の気持ち・保育園での流れ）に応じてコントロール（適応）できる。 | | 担任保育士を中心に、日常の簡単なルールを繰り返し根気強く伝えたり、手本を示したりすることで、子どもが自らルールの大切さに気付き身につけていた。 | B |
| ２．保育方針 | | | | |
| 評価指標 | | 評価 | | 自己評価 |
| 根拠に基づく保育を実践します。 | | 経験や月齢ごとの発達年齢だけ保育をすることが多く、さらに発達間のつながりを意識したり子ども達の日々の生活を注視しながら必要な援助を行っていく必要がある。 | | C |
| 子ども自身の発達状況や個性を尊重します。 | | 一人一人の発達年齢をとらえることはできていた。次の発達段階に向けて「この子に何ができるだろう？」と意識を向け、子ども達が「自分のちから」で成長できる意欲を育てたい。 | | C |
| 子どもの目線・気持ちに立って子どもの行動を考えます。 | | 大人のやりたいこと、させたいことが先行してしまい活動が上手く進まなかった際に、会議等を活用し保育士間で話し合いの場を多く持ち、共通認識しようとする意識が持て、子どもと関わっていた。 | | B |
| 子どもの話しや想いを聴いた上で、伝え導いていきます。 | | 子どもの話を聞くことはできていたが、保育士が言葉を先取りすることが多かった。聴いた上でどのように子どもたちを導いていくかを意識した聴き方が不十分であった。子どもとの対話の中で感じた迷いを、もっと保育士間で共有し解決できるとよい。 | | C |
| 「いいとこ見つけ」を心がけます。 | | 子どもの個性や状況を、「なんでなのか？」と考え、良い成長の現れとしてとらえることは出来ていた。 | | B |
| やり方を教えるだけでなく、「やってみたい」「学びたい」という意欲も育みます。 | | 保育士が先回りをして正解を示す場面があったので、子どもの発達段階に応じた「自分でやってみよう」とする過程を見守ろうとする意識が足りなかった。 | | C |

Ⅱ　施設機能に関わる事

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 大項目 | 中項目 | 評価指標 | 評価 | 自己評価 |
| 小規模保育施設における保育 | 発達の連続性を考慮した保育 | 0歳から3歳までの発達を理解し、子ども発達や実態に合わせて遊びの充実をしている。 | 発達の理解が充分とは言えないため、職員ひとりひとりが更に学ぶ意欲を持ち、子どもの要求に合わせた遊びを提供できるように努めていく。 | C |
| 一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮 | 園児一人一人の生活や経験、発達過程を理解し、安定した穏やかな気持ちで園生活ができるようにスキンシップをとり、子どもの想いに寄り添っている。 | スキンシップは十分に行へ、寄り添おうという姿勢は評価できる。子どもの姿や声を漏らさず、保育士の解釈だけで援助を進める事のないように出来ると更に良い。 | C |
| 環境を通して行う保育 | 子どもの活動がより豊かになるよう考え、遊びの展開に応じて環境の再構成を工夫している。 | 様々な活動を提案する力はあった。しかし保育士の「させたい」気持ちが前に出すぎてしまうことがあったので、その時々の子どもの状況や遊びの展開に合わせ進めていけると更に良い。 | B |
| 安全管理  ・指導 | 事故防止・防災 | 様々な状況を想定し、危機管理体制を職員全員で作り、園児にも安全行動を身につける指導をしている。 | 主任、防災補佐を中心に、年間計画に基づいた防災訓練の実施が出来、子どもたちも繰り返しの訓練で安全行動が身についてきていた。防犯訓練に関しては、回数・内容をさらに充実させていく必要がある。日々の安全対策については、毎日自主点検を行い、危険個所、修繕必要箇所があった場合には、その都度対策をとっていた。 | B |
| 保健管理  ・指導 | 健康教育の充実 | 基本的生活習慣が自立し、自分の身体に興味関心を持ち過ごす。 | 身体測定、内科健診、歯科健診時は、活動に自分の体に興味が持てるよう、絵本等を使い伝えていた。絵本やイラストだけではなく、遊びの中で子どもたちが「なんでだろう？」「知りたい」と興味が持てる工夫が出来ると更に良い。 | B |
| 特別支援教育 | 支援体制の構築 | 一人一人の子供を理解し、気になる子に対し支援計画を作成して保育をすると共に、全職員が子どもの関わりに対し共通認識を持ち援助している。 | 気になる子に対して、家庭との連携や関係機関との連携は行えていた。特別支援計画作成対象児はいなかったが、月間指導計画の中で個別の計画を立て対応できていた。全職員での共通認識に至っていない点が課題。 | B |
| 組織運営 | 組織体制の充実 | 園運営（行事・保育・保護者対応など）について職員間で連携を取り合い、保育を進めている。 | 会議等を活用し職員間で考えようという姿勢が持てるようになってきた。行事や係の担当者、担任等、担当者だけでなく、職員がより多く話し合え、みんなで考えるシステムを更に作りたい。 | C |
| 研修 | 研修体制の充実 | 保育理念・目標・方針に基づき園内研修を行い「社会性の基礎ができた子」の育成を目指し、具体的な手立てや教材研究を行い、実践に生かす努力をしている。 | 園内研修、外部研修、合同研修発表と、充実した研修企画があるが、能動的に「やってみよう、学ぼう」という意識が高められるよう、検討を重ねる必要がある。 | B |
| 教育・保育環境の整備 | 教育・保育環境の充実 | 子どもが「楽しい」「またやりたい」と感じ、保育者自身も目的を持った環境や教材の工夫をしている | 保育に対し、結果を振り返り工夫を重ねることが不十分であった。 | C |
| 大項目 | 中項目 | 評価指標 | 評価 | 自己評価 |
| 家庭との連携 | 家庭環境への支援機能の充実 | 保護者からの意見や要望、相談事を早目に解決できるように、保護者と職員が話し合いの場所をつくったり、園からのおたよりを発行している。 | 毎月1回の園だよりの発行、個別面談は年間2回出来ている。保護者から出たご意見ご要望には、職員間で話し、保護者とも話し合いながら迅速に対応できていた。また、引き続き連絡帳や口頭でのやりとりからも、保護者の悩み等を察知し共に考えていきたい。 | A |
| 連携園との連携 | 連携園との連携の推進 | 連携園を親しみを持って交流する機会を作っている。 | 園児受け入れ以外に連携園と交流が少なかった。 | D |
| 地域との連携 | 信頼される園づくりの推進 | 園外保育や地域の多施設と交流したり、近隣住民との触れ合いに努めている。 | 近隣の通所介護施設（デイサービス）との交流を、今年度から新たにスタートできた。連続的に交流の機会を作っていきたい。 | B |

Ⅲ　園としての保育の総括

|  |
| --- |
| 保育方針に沿って、子どもの目線に立ち、言葉かけを主とした援助は適切になされている。ただ、保育士によって子どもへの援助等の対応の差もあった為、当園の目標とするチーム保育には至っていない。職員間で共通認識を持ち、子どもと関わり保育ができる体制づくりは大きな課題。また、組織体制も改善していく必要がある。なぜ仕事を一人で抱えてしまうのか、なぜ相談できないのか、どうしたら全員で検討しながら行えるのかを職員全員で考え、具体的な方法を見つけたい。 |

Ⅳ　園としての経営の総括

|  |
| --- |
| ・職員配置にとらわれず、保育環境の整備や保育の中身の精査等に注力できるよう、保育士の確保を引き続き進める必要がある。 |